

「首里城と金工」— 国家権力の造形— に寄せて

栗国恭子（附属研究所共同研究員）

今回の講義→私が、東アジアにおける沖縄の金属文化をテーマに研究して約 20 年間の時間がながれました。初期は『首里城研究』（首里城友の会発行）に金属文化関係の論考を寄稿していました。芸大附属研究所の講座でも、何度か金属文化関係の内容を担当してきました。

その時間の中で、調査研究を進めると同時に琉球国金属製祭祀道具の復元事業（首里城公園関係）にも参加してきました（参加研究者は栗国をはじめ久保、安里両先生、那覇市立博物館学芸員など、と復元担当の京都の職人・松田さん）。質の高い復元は職人だけではできません。研究者だけでも無理です。他の工芸品の復元のように職人さんまかせでなく、琉球の金工品復元に関しては、職人の方へ「琉球の技の特徴を研究者が伝えて試作品を皆で確認を取り、科学分析なども行いどのような技術を採用し、復元品を完成させるかは時間もかかり難しい決定をする繰り返しでした。復元された金工品は、今回授業スライドで紹介する金工品のどの品のコピーでもありません。より古い質の高い技術を目指し（鎌倉芳太郎撮影資料）復元し、形状は現在残っている品（国宝）を採用しました。

しかし 2019 年 11 月の首里城火災で、これらの復元品も焼失したようです。個人的にはかなりダメージを受けました。現在沖縄には王府時代の金工品を復元できる技術を持った人材はいません。関わった京都の職人さんだけがその技術の特徴を形にできる現状です。明るい要素の少ない現状にあって、学生の皆さんと「琉球の金属文化」のあり様を共有し、理解を深める事が重要です。

「首里城と金工」についての研究課題はまだ多く、研究者も多くはありません。今回の講義では基本的な情報確認及び金属文化の捉え方のイメージを持ってもらいたいと思います。金属を産出しない琉球・沖縄で、国家権力を持つ王や王府がどのように金属文化を琉球に取り入れたのかを考えていきましょう。